The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Paul Valery : Un regard qui renouvelle le monde
Author(s)	林, 直子
Citation	大阪大学, 1998, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/40520
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【7】

氏　　名	林（はやし）　直子（なおこ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　13593　号
学位授与年月日	平成10年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科仏文学専攻
学　位　論　文　名	Paul Valéry : Un regard qui renouvelle le monde
論文審査委員	（主査） 教　授　柏木　隆雄 （副査） 教　授　鷲田　清一　　助教授　和田　章男 外国人教師　アニエス・ディソン

論文内容の要旨

本論文はフランス20世紀を代表する詩人，批評家ポール・ヴァレリーの視覚に関する記述に注目し，彼が物体をあえて「認識しない」ことをめざす特殊なものの見方，いわゆる「私のものの見方」があり，ヴァレリーが「理解しないこと」に大きな価値を見いだしていたことを彼の日常の思索ノートである『カイエ』や詩作品，評論を通して明らかにしたものである。論文はフランス語でA5版225頁三部6章からなる。

第一部は見る行為の原点であるその対象の世界が，どのように現れるか，その初源の形の追求からはじまり，物の初源，見る主体の初源である“je”の検討を行い，このjeと可視的世界との関係を論じ，すべての観念をいったんtable rase白紙の状態に戻して，純粋に見えるものへ還元するヴァレリーの根本的な思想構造にいたる。先見や知識を排して，対象をいったん零にもどし，「今ここにあるici et présent」私に対峙する現象として捉えられる世界は，全体として，見る私自身をさえ包括してしまう。私が見る最初の世界は，輪郭こそ有限でありながら，内部は混沌として，ちょうど夜明けの状態として比喩され，何の特性も持たない純粋な状態，あらゆる可能性をもつ萌芽が「色のついた空間」として「私」の前に現れる。

第二部はこうした混沌の世界を主体がどのように見るかを説く。知性でものを見るのと目でものを見る区別がされて，「純粋な感覚」（驚き）で受けとり，「再―認識」（問い掛け）し，さらに「認識」（理解）する後者の過程をあきらかにする。ヴァレリーのいわゆる純粋感覚，身体の役割，さらに言語の役割を検討，「網膜でなく語彙で見る」ことが批判され，感覚によって受け取られた世界を言語を介入させず，「理解しないままに見る」，いわゆる「私の物の見方」が生まれることになる。対象としての世界を「いま，初めて，ここで見る」ことによって，私自身をもその世界に巻き込み，今ここにある私の視線は永遠の現在に生きつづける。

第三部は，そうした認識の原則から生まれた創造の問題を取扱い，視覚芸術としての絵画やその周辺，言語芸術としての書く行為を論じる。芸術批評家としてヴァレリーは「見る人」としての画家を重視する。彼は自己の創作においてもまた「理解せずに見る」という根本的態度を貫くために，伝達を目的とする通常言語から切り離された詩人独自の言語世界の構築をめざす。完成よりも完成の過程に価値を置くのである。混沌がはらむ生成力を汲み尽くさず残そうとする態度，それこそが彼の創作活動の出発点であって，ヴァレリーの詩的言語の本質，書く行為が，「理解せずに見る」態度を貫いて，常に途上の状態にあることの積極的意味が生ずるのである。

論文審査の結果の要旨

この論文において評価すべき点は，第一に従来主知的な文学者とされてきたヴァレリーを，彼の視線を中心に分析して，知性と対立する感覚を重視する新しい側面に光をあてたことである。知の根源を問い，知性を明確にとらえようという意識の裏側で，そのためには寧ろ混沌とした世界を現前させ，あるがままに，知力をまず捨象した形でとらえて，そこに詩的な生成力をくみ取ろうとする彼の精神構造は，従来の知性の人ヴァレリーとは異なる「理解しない」，「混沌」を認める姿を明らかにし，ヴァレリーと同時代さらに現代の哲学的動向との現象学の暗示的な類似をも予測している点もこの論文の特徴である。また論旨明快で，ていねいに論点を一つ一つ丹念に説き起こす点に好感が持てるし，各章の論理的つながりにも配慮され，ヴァレリーの作家活動全般にわたって視界に収められている点も，この論文のスケールを大きくしている。とりわけ近年研究が進んだ『カイエ』を充分に読みこんで，他の先行の研究者たちの成果も取り入れて，視野の広い議論となっていることはこの論文の優れたところである。また『テスト氏』や『わがファウスト』をとりあげて，テスト夫人エミリー，ファウストの秘書のリュストといった付随的と思われる女性の重要性を指摘した点も意義がある。

このように，この論文はヴァレリーの知的な活動に鋭いメスを入れる優れた論文であるが，問題点もないわけではない。「理解しないこと」を知性の人ヴァレリーにおいて，肯定的に読み，『カイエ』を中心としてデリダ，フッサール，メルロー・ポンティなどの現代思想との接点を探る試みは，新鮮で意欲的であるが，たとえばヴァレリーとフッサールを結び付けるはずの「還元」の概念について，ヴァレリーとフッサールではその前提が異なり，やや無理な議論の展開になっている。むしろ「純粋」への指向という同時代の思想的コンテクストの中で両者を見て関係づけるべきだろう。そのための思想史的な裏付けの作業が充分とは言えない。また叙述を明確にしようとするあまり，やや機械的に論点が整理されているところもないわけではない。また本論文のタイトルについても，論文の内容を的確に示すにはもう少し工夫があってもよい。しかしこれらの欠点は本論文の本質的な価値を損なうものではない。

以上の結果に基づき，本審査委員会は本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。